

イギリス領アメリカ植民地における奴隷制と イングランド国教会

—海外福音伝道協会年次記念大会の説教を中心に—

青 柳 か お り *

【要 旨】 18世紀初頭からイングランド国教会は海外福音伝道協会(SPG)を設立して、イギリス領アメリカ植民地の異教徒へ布教活動を行っていた。国教会はアフリカ系奴隷にキリスト教教育を行い改宗させようとしていたが、奴隷の主人たちからの反対が大きかった。奴隷がキリスト教徒になると自由になり、財産権が侵害されると考えられていたのである。18世紀のイギリスでは奴隷制は当然とみなされ、奴隷貿易も盛んに行われており、SPGや国教会も奴隷制を支持していた。しかし、非人道的な奴隷貿易・奴隷制に対してはクエーカーなど非国教徒系教会が反対しており、18世紀終わりに奴隷貿易廃止運動も起きた。従来、奴隷貿易廃止に関する研究においては非国教徒や廃止運動に関わった政治家などが注目されており、国教会は見過ごされてきた。しかし、18世紀後半に国教会の高位聖職者である主教の中には、奴隷貿易・奴隷制の緩和や廃止を希望する者もいたのである。本研究では、海外福音伝道協会年次記念大会の説教を中心に、そのような主教の主張を検討し、奴隷制についての国教会の思想に変化がみられたことを明らかにする。

【キーワード】 奴隷制 奴隷貿易 イングランド国教会 海外福音伝道協会

はじめに

1701年6月、イギリス領アメリカ植民地の異教徒にキリスト教を布教するため、イングランド国教会によって海外福音伝道協会(the Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts, 以下、SPGと略記)が設立された。これは、イングランド国教会による初めての公式な布教団体で、国王ウィリアム三世(William III)の勅許状を得ていた。設立の中心人物は、国教会聖職者でメリーランド主教代理を務めたことのあるトマス・ブレイ(Thomas Bray)であった。

平成26年10月31日受理

*あおやぎ・かおり 大分大学教育福祉科学部情報国際教育講座(西洋史)

17世紀から海外の国教会を管轄していたのは歴代のロンドン主教で、彼らは植民地へ主教代理を派遣していた¹⁾。植民地に関心の高かったロンドン主教ヘンリ・コンプトン(Henry Compton)は、1696年、メリーランド主教代理にトマス・ブレイを任命した²⁾。メリーランドでは主教代理を受け入れるための法律の整備が遅れていたため、ブレイはすぐに出発できず、ウォリックシャのシェルドン教区で主任司祭をしていたが、ロンドンへ移ってメリーランドの国教会を支援するための準備をした³⁾。ブレイは1699年12月にメリーランドに向けて出発したのち、翌年3月に到着し、その夏に帰国した。滞在期間は短かったが、彼は帰国後に植民地各地の状況を覚書に詳細に叙述した。彼によれば、カトリック教会やクエーカーとは対照的に、すべての場所で国教会聖職者は不足していたという⁴⁾。彼は植民地には図書館と聖職者が必要であると確信していた⁵⁾。

17世紀以来、イギリスによるアメリカ植民地建設がすすめられていたが、一般的にイギリスの政治家や国教会聖職者は植民地への関心は低く、積極的な支援をしなかったため、国教会はイギリス本国の最大の宗教的勢力であるにもかかわらず、アメリカにおいては、プロテスタント非国教徒(Dissenter)の諸宗派やカトリック教会と比較して弱体であった。国教会はアメリカ植民地においては主教制教会(Episcopal Church)と呼ばれており、信者数に対して聖職者が不足していた上に、アメリカ先住民や黒人といった異教徒も存在していた。そこで、SPGは聖職者を維持することと、異教徒へキリスト教を伝道することを目的として設立されたのである⁶⁾。SPGの設立目的は勅許状に記されている。

主教制教会はイギリス領アメリカ南部や西インド諸島では有力であったが、聖職者は不足していた。中部と北部では少数派に過ぎず、特に北部では非国教徒系教会が優位であった。また、カナダ方面ではフランス、南部ではスペインのカトリック教会との勢力争いがあり、主教制教会の地位は低かった。SPG宣教師は異教徒への布教を開始したが、宣教師不足や言語の違いなどから彼らへの布教は困難であった。特に奴隷の場合は、彼らの主人たちが強く反対していたのである。それにもかかわらず、奴隷制が当然とみなされていた18世紀において、イングランド国教会は奴隷への布教を推進した。

さて、イギリスでは法律によって1807年に奴隷貿易が廃止され、1833年にイギリス領内の奴隷制が廃止される。18世紀後半に奴隷貿易廃止運動が高まるが、非国教徒であるクエーカーが奴隷貿易、奴隷制に反対していたことや、庶民院議員ウィリアム・ウィルバーフォース(William Wilberforce)などの廃止運動の指導者はよく知られている。また、メソヂスト聖職者ジョン・ウェスレ(John Wesley)、世俗の指導者グランヴィル・シャープ(Granville Sharp)やトマス・クラークソン(Thomas Clarkson)なども反奴隷制運動に関わった主要な人物として知られている。しかし、イングランド国教会と奴隷制の関係については日本・海外においてあまり研究されてこなかった⁷⁾。

本稿では、イングランド国教会の布教団体であるSPGに注目して、18世紀における奴隷について言及した国教会聖職者の説教および著作を分析し、国教会の奴隷貿易・奴隷制に対する思想とその変化を明らかにしたい。主要な史料として、SPG年次記念大会での説教を用いた⁸⁾。SPGでは、1702年以降、毎年2月に代表の一人の聖職者が行った説教を出版していた。説教の対象はSPGに寄付をする会員や国教会の信者であるが、説教の反響は大きく、中にはアメリカ植民地で大量に配布されるものもあった⁹⁾。それらの説教はイングランド国教会の立場を表していると考えられる。

1 イギリス領アメリカ植民地における奴隷の主人

(1) 布教の困難

布教に熱意のある聖職者や SPG の会員もいたが、奴隷の主人や奴隷商人をはじめ奴隷制を擁護する人々は、奴隷を人間ではなく、財産、所有物、家畜と考えていた。彼らは黒人奴隷を蔑視しており、奴隷に教育したりキリスト教化したりすることには反対した。SPG の説教においてさえ、1734 年、ウェルズ首席司祭アイザック・マドックス(Isaac Maddox)は、先住民と黒人は非常に迷信深い、ばかげた不敬な儀式をしており、愚かで残酷、野蛮であると非難し、黒人奴隷のことを極悪で不正であると決めつけた¹⁰⁾。18 世紀後半の SPG 年次記念大会の説教になるが、ロンドン主教ビールビ・ポーティアス(Beilby Porteus)は次のように述べた¹¹⁾。「我々の黒人奴隷は、ほかの被造物とのすべての比較を超えている。一般的に、彼らは育成される理解力も救われる魂も持っていないので、単なる機械、労働するための道具と考えられている。多くの場所で洗礼の儀式のようなことが執行されているだけで、宗教の教義や義務についての適切な指導のための十分な時間や援助が不足している。・・・西インド諸島だけでも、文字通り世界の神を知らずに生きている 40 万人以上の人間がいることになる。彼らは、創造者や贖い主の知識なしに、自然宗教や啓示宗教の主義なしに、道徳的義務の思想なしに生きている。・・・」

SPG の布教は一部の地域では成功したが、当時の SPG 宣教師からの本部への報告においても、奴隷への布教活動がすすまないことが明らかになっている。布教の現状と困難について、1729 年、ロンドン主教エドマンド・ギブソン(Edmund Gibson)は、主人と女主人への『二通の書簡』において、プランテーションにおける黒人は非常に人数が多く、教区は大変広大であり、牧師と教師が最大限のことを行っても、この布教が必要とするのに十分な世話や要求には不足するであろうと述べた。また彼は、奴隷が異教の儀式や偶像崇拜に慣れていること、奴隷と宣教師がお互いの言語をまったく知らないこと、主人からの反対などを布教がすすまない理由に挙げている¹²⁾。奴隷に洗礼を受けると、彼らの財産および奴隷を自由に売却する権利が破壊され、奴隷が勤勉に労働しなくなると考えられていた。

このほかに、奴隷が非常に愚かであることや、アフリカでは一夫多妻、一妻多夫などの習慣があることなどもキリスト教化の妨げだと言われた。また、彼らは救われる魂がないのでキリスト教徒にはなれないという意見もあった¹³⁾。言語の問題に関して、宣教師たちは、英語が通じない成人ではなく若い黒人に英語教育から始めることを提案していた。

(2) 奴隷と主人たち

奴隷の主人からの反対が強かったことが、布教がうまくいかない大きな原因であったようである。奴隷をやさしく扱い、キリスト教教育を受けさせる主人たちもいたが、たいていは利益を追求しており、さまざまな理由で反対していた。第一に、奴隷が教育を受けると労働時間がその分減る。第二に、洗礼を受けると奴隷が自由になり、自分たちの財産が侵害される。第三に、奴隷が知識を持ち、傲慢になり、勤勉に働かなくなる、さらには反乱を企てるようになる、というのであった¹⁴⁾。

当時、キリスト教と奴隷制が両立するののかという問題が存在していた。17 世紀においてイギリス人の間では、洗礼を受けてキリスト教徒となった奴隷は自由になれるという観念や習慣があり、キリスト教徒は奴隷ではありえないという考え方が一般的であった¹⁵⁾。キリスト教徒は

キリスト教徒を奴隷の身分にしておくことができないからである。この思想を根絶することは困難であり、植民地時代を通じて存続していたのであった¹⁶⁾。バルバドスについての著述をしたリチャード・リゴン(Richard Ligon)は、1673年、プランターが彼らの奴隷がキリスト教徒になるのを許可しようとしないと述べている。彼は、「一度キリスト教徒になれば、彼らを奴隷だとみなすことはできなくなる。彼らへの支配力を失ってしまう。[奴隷に洗礼を許したら]この島のすべてのプランターと対立する。」と主人から言われたと記述した¹⁷⁾。奴隷の主人たちは、奴隷にキリスト教教育を受けさせ改宗させた場合、彼らが自由になって、自分たちの財産や奴隷を売買する権利を失うと考えており、布教に反対していたのであった。

SPGも西インド諸島において奴隷を所有していた。1710年、SPGはクリストファ・コドリンソン(Christopher Codrington)大佐から、バルバドスの800エーカーの二つの領地と300人の奴隷を相続した¹⁸⁾。彼はイギリスの軍人であり、バルバドスのプランターであった。1702年2月に書かれた遺言書では、「バルバドス島における私の二つのプランテーションを国王ウィリアム三世によって設立された海外福音伝道協会に遺贈する。さらに、そのプランテーションでは少なくとも300人の黒人、適切な人数の教師(professor)と学者(scholar)を維持する。…」と書かれていた¹⁹⁾。

SPGは黒人を監督することによって、キリスト教と奴隷制は一致すると証明しようとした²⁰⁾。約50年後の1760年までに、それらの奴隷の中にはキリスト教徒はほとんどいなかったこと、改宗した者は名前だけのキリスト教徒であったことが明らかとなった。学校は白人だけのために設立されたのであった。450人の奴隷を輸入したにもかかわらず、奴隷の全人口が三分の一へ減少した事実は、人間的な試みが失敗した証拠である。SPGは不動産の直接の管理には関与せず代理人を選択し、彼らに干渉することはなかった。人間的な待遇とは程遠く、1732年までSPGは奴隷の胸にS-O-C-I-E-T-Yの文字を烙印する慣習を認めていたか、もしくは知らなかった。1760年までに労働力の供給が急激に減少したので、SPGはコドリンソン・プランテーションの状況を調査する特別委員会を設立した。カンタベリ大主教トマス・セッカー(Thomas Secker)は、人数の減少は奴隷の待遇と関係があるのではないかと提案した²¹⁾。

一般的に奴隷所有者は奴隷の幸福には無関心で、奴隷の改宗やSPGの布教活動には反対していた。ただし、18世紀後半になるが、プランターの中にはウィリアム・ノックス(William Knox)のように布教賛成の人物もいた。彼は、1768年、匿名で『高德の海外福音伝道協会に向けた、植民地における自由インディアンと黒人奴隷の改宗と教育についての三篇の論文』(新版1789年)という著書を刊行した。彼も黒人は愚かで知的ではないとしているが、奴隷に教育を受けさせようとしぬ主人を批判し、次のように主張した²²⁾。

黒人の愚鈍な愚かさは、彼をどのような教育欲もない状態にしてきた。創造主がこれらの黒人を他の人々より少し低くお造りになったのか、彼らが彼らの知的な能力を使わないから失くしてしまったのか、私は決められない。しかし、新しい黒人(最近アフリカから輸入されてきた者たちはこう呼ばれる)が、怠惰な愚かさの完全な典型的な人物であることは確かである。・・・しかし、彼らの愚かさゆえに彼らを我々が使用するための家畜だと考えることを、我々は是認できない。まして、彼らが共通の救いについてのすべての知識を受けることを否定しない。我々の植民地で生まれた黒人は疑いなく、教育を受けることができる。・・・フランスのローマ・カトリック教会は奴隷に教育している。しかし、

我々のプランターは一般的に、彼らの黒人が労働以外のことを教えられることに反対しているのである。ただし、我々の寛大な北アメリカのプランターは、彼ら自身が彼らから恩義を受けていると考えている限り、宗教に関心をもち奴隷の義務を免除することを正確に守っている。・・・プランターに奴隷を援助するように説得できないならば、彼の奴隷を教育するためのどのような方法を提案することも無駄になってしまうであろう。

このように、彼は奴隷に教育しているフランスのカトリック教会と比較して、イングランド国教会による布教を勧めるとともに、プランターに対して奴隷に教育を受けさせるように訴えた。

II イングランド国教会による奴隷への布教

(1) 国教会の布教方針

黒人奴隷への布教に反対する思想が強い中で、イングランド国教会の方針は、教会は異教徒をキリスト教化する義務がある、彼らを暗闇から光へと導くべきであるというものであった。たしかに、国教会聖職者も奴隷は非常に愚かであると考えていた。SPG 年次記念大会における説教や報告書で、多くの聖職者が異教徒に対してよく用いる表現は、野蛮、野蛮人、残酷、無知、暗黒の世界にいるなどで、迷信を信じる、貧しいといった記述が多い。いずれの説教でも異教徒の悲惨な状況の記述が多くみられた。

しかし、聖書には布教を推進するための言葉がある。たとえば、「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授けなさい。(マタイによる福音書第 28 章 19 節)」「それから、イエスは言われた。全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。(マルコによる福音書第 16 章 15 節)」などである。SPG の説教においても、このような引用を用いて奴隷に布教することが熱心に説かれた²³⁾。

ここでは、黒人奴隷へ積極的に布教すべきであると主張した説教・著作を検討していく。1711 年、セント・アサフ主教ウィリアム・フリートウッド(William Fleetwood)は、たとえアメリカと西インド諸島すべての奴隷が永遠に異教徒であり続けるとしても、バルバドスにおけるコドリントンの SPG 所有の奴隷はキリスト教徒にする必要があり、彼らにキリスト教教育と洗礼を行い、永遠の命に至る道へ導かねばならないと述べている²⁴⁾。

布教に反対の主人たちは、奴隷は単なる財産であり救われる魂がないと考えていた。一方、イギリス本国の SPG 年次記念大会の説教や国教徒の著作では、奴隷には魂があり、同じ出自の人間である、キリストは彼らのためにも血を流されたということを述べたものがあつた。1714 年、カンタベリー首席司祭ジョージ・スタナップ(George Stanhope)は、次のように述べた²⁵⁾。「奴隷は未開で無教育で、公共で売買され、荷物を運搬するための家畜のように働いている。しかし、彼らの魂は彼ら自身のために世話されるべきである。彼らは我々と同じ神によって創造され、同じ肉体と血によって形成され、同じ共通の子孫からの出自であり、同じ魂を授けられ、不滅の幸福を同じように受ける資格がある。彼らもまた同じ尊いイエスの贖いによって解放される。生まれと富、環境と肌の色、野蛮と奴隷、これらは単に付随的な違いである。本質的な部分が同じであり続けている場合、そのようなものはあまり評価されるべきではない。」

1729 年、ロンドン主教ギブソンは奴隷の主人たちに向けての著作において、「私はあなた方

に、彼らを単なる奴隷として、労働する家畜と同じレベルで考えないよう懇願したい。そうではなくて、あなた方と同じ体格と能力を持ち、永遠に幸福になれる魂と、そのための教育を受ける理性と理解力を持つ男性奴隷と女性奴隷として考えてほしい。・・・」と呼びかけた²⁶⁾。

国王のチャプレン（礼拝堂付き牧師）フィリップ・ベアクロフト(Philip Bearcroft)は次のように奴隷も同じ人間で魂があると述べた²⁷⁾。

我々のプランテーションでは、恥知らずにキリスト教の愛が無視されている。彼らは我々自身と同じ血統ではなく、救われる魂がないかのように、貧しい黒人奴隷の改宗はおろそかにされている。一方で、聖パウロは我々にはっきりとこう言われた。「神は、一人の人からすべての民族を造り出して、地上の至るところに住まわせ、季節を決め、彼らの居住地の境界をお決めになりました。(使徒言行録第 17 章 26 節)」「その一人の方はすべての人のために死んでくださった。(コリントの信徒への手紙二第 5 章 15 節)」キリストは彼の最も尊い血を彼らのために流されたのに、キリスト教徒は恥知らずに彼らを見捨てるのであろうか。

また、協会の事務局長デヴィッド・ハンフリーズ(David Humphreys)や国教会聖職者アンソニー・ヒル(Anthony Hill)は、奴隷の主人たちは根拠もないのに黒人は魂がないとって彼らに教育を受けさせず、キリスト教徒になるとさらに悪い奴隷になると主張して、聖職者を迫害していることを批判した²⁸⁾。

(2) SPG と奴隷制

ただし、SPG 関係者は奴隷制そのものは認めていたようである。聖書において奴隷制は禁止されていないからである。たとえば、ロンドンデリ首席司祭ジョージ・パークリ(George Berkeley)は、プランターが黒人のことを不合理に差別し教育や sacrament を受けさせないことを批判したが、洗礼を受ければ自由になれるとか、洗礼を受けることは奴隷の状態と矛盾しているというのは誤った観念であると考えていた。彼は「福音の自由は現世の奴隷状態と両立する。そして、彼らの奴隷はキリスト教徒になることによって、より良い奴隷になるであろう。」と述べた²⁹⁾。

また、SPG 事務局長ダニエル・バートン博士(Dr. Daniel Burton)も奴隷制を認める発言をしており、SPG の立場を表明している。クエーカーで奴隷制に反対するアンソニー・ベネゼ(Anthony Benezet)という人物が、1767 年 4 月 26 日付の書簡で黒人奴隷を購入し保有することについての協会の意見を尋ねた。1768 年 2 月 6 日付の事務局長からの返事によれば、SPG はバルバドスのプランテーションの代理人に奴隷にキリスト教を教えるよう指示しており、その指示は守られてきたと信じているが、しかし、SPG は奴隷を保有する習慣を違法だとして非難することはできないと書いている。キリストの使徒たちによって与えられた主人と奴隷両方への教訓において、それとは反対のことが明らかに述べられているからである。もしも、奴隷制は違法であるという教義がイギリスの植民地で教えられたら、主人がそれを確信するかわりに、より疑い深く残酷になり、より彼らの奴隷にキリスト教を学ばせようとしなくなるし、貧しい奴隷が奴隷制は違法だといって主人に反乱を起こすよう非常に強く誘惑されるので、双方にとって最も恐い結果が続くとしている³⁰⁾。

イギリス人の間では、キリスト教徒に改宗した奴隷は自由になれるという観念や習慣があった。しかし、聖書では多くのテキストにおいて、奴隷は主人へ服従しなければならないこと、たとえ主人と同じキリスト教になっても服従することが書かれているのである。

多くの SPG の説教や国教会聖職者の著作において、奴隷に洗礼を授けても、現世の身分および主人の奴隷所有にまったく変化は生じないということが強調された。奴隷は洗礼を受けてキリスト教徒になっても自由にはなれないということである。彼らは、奴隷制は古代から合法であることを主張し、洗礼を受けると奴隷は自由になれるという観念に反論した。そう主張することで、奴隷の解放や財産の侵害を恐れる奴隷の主人たちを安心させ、布教活動を説得しようとしたと思われる。

1706年、チチェスタ主教ジョン・ウィリアムズ(John Williams)は、征服や売買などで奴隷制の習慣はほとんどの世界で、すべての時代を通して続いてきたし、アブラハムの時代もそうであったと述べた。また、「洗礼によって人権は変更されず、人間の法律によって変更されるまではそのままである。そういうわけで、彼らがキリスト教徒になっても奴隷からは逃れられないし、主人からの自由を主張する権威を彼は与えられない。これらのことにキリスト教は干渉しなかった。」と述べている³¹⁾。

次にセント・アサフ主教フリートウツの説教を紹介したい³²⁾。

主人が奴隷をキリスト教徒にしても、彼らの奉仕や利益を失う恐れはない。彼らがキリスト教徒を奴隷にとどめておくことは、神の法によっても、国の法によっても禁止されていない。奴隷は洗礼を受けた後も以前と同様の状態である。・・・聖パウロの時代には、キリスト教徒になることによって以前のすべての契約から自由になった人々がいたと想像できる。しかし、聖パウロは彼らにこれはキリスト教徒の自由の意味ではないと話した。キリストが彼らを自由にしたという自由は、彼らの罪からの自由や、死の恐怖や永遠の苦痛からの自由であって、彼らが自発的に従事している生活状況や、彼らの不幸によって陥った生活状況からの自由ではなかった。おのおの召されたときの身分にとどまっていなさい。キリストの信仰を持ったとしても、彼は以前と同じ生活状況が続くことから逃れられない。それは現世における彼の状況を変えることはない。キリスト教の自由はまったく精神的なのである。現世において、キリストの法律はこの性質を変化させない。・・・我々の国では、奴隷を所有することや所有し続けることは合法であり、同様に、彼らがキリスト教徒であっても奴隷として所有すること、そうし続けることは合法である。・・・

このほかにも、SPG 年次記念大会の説教等で、奴隷へのキリスト教教育は必要であるが、奴隷がキリスト教徒になってもその奴隷状態に変化はない、財産所有に変更はなされないという発言は数多くみられる³³⁾。ギブソンも主人への『二通の書簡』において同様に奴隷身分を擁護した³⁴⁾。以上のように、イングランド国教会は奴隷制を擁護しており、たとえ奴隷がキリスト教徒に改宗しても自由にはなれないという立場であった。

III 主教による奴隷制批判の説教

(1) ウォーバートンによる説教

ここでは、イングランド国教会内部の奴隷制への考え方の変化を指摘したい。基本的にイングランド国教会は奴隷制を支持しており、SPG も奴隷を購入・所有していた。しかし、18世紀後半になると奴隷貿易や奴隷制を批判する国教会聖職者も現れ、SPG 年次記念大会の説教においても、そのような説教がなされた。例えば、以下の主教たちである。

1766年 ウィリアム・ウォーバートン(William Warburton) グロスタ主教

1783年 ビールビ・ポータス(Beilby Porteus) ロンドン主教

1789年 サミュエル・ハリファクス(Samuel Hallifax) グロスタ主教

1793年 ジョン・ダグラス(John Douglas) ソールズベリ主教

1797年 チャールズ・マナー・サットン(Charles Manner-Sutton) ノリッジ主教

最初に明確に奴隷貿易・奴隷制を批判したのは、1766年のグロスタ主教ウォーバートンであった。彼は次のように述べた³⁵⁾。

奴隷は我々の財産であるが、肌の色以外、我々と同様のすべての資質を持ち、我々と同様のすべての能力を備えた被造物である。・・・

悪名高い奴隷貿易が神と人間両方の法律を直接侵害している事ほど、すべての人にとって確かで明らかなものはない。神は人間を自由に創造し、神の恩寵は彼に彼の自由を肯定させる。これらのあわれなアダムの子孫の追放された者は彼らの故郷と母国から詐欺的行為と暴力によって引き離されたが、この侵害の口実として、それによって彼らはより幸福になり、彼らの状況はより望ましくなったのだと主張されてきた。しかし、あなたは他人の幸福を判断できるのだろうか。・・・あなた方の奴隷は、今までに彼らの不幸な状態について不満を言わなかったか。・・・あなたの奴隷に、彼ら自身で何が彼らの幸福となるのか判断させなさい。・・・これらの貧しいあわれな者たちの世俗の状態に関して、あるプランターの残酷さと精神的な事についての無宗教的な怠慢は一般的に醜聞になるであろう。

イングランド国教会や SPG が奴隷制支持の方針であったにもかかわらず、彼はプランターや残酷な奴隷貿易・奴隷制を批判している。それらの廃止までは述べていないが、イングランド国教会の高位聖職者である人物がこのような説教をしたことは重要である。ヴァッサーも、「長い間確立された SPG の方針や、イングランド国教会の主教としての、協会のメンバーとしての立場を考えれば、そして彼が公に協会の習慣と方針を批判した事実を考えれば、彼の主張は本当に勇気のあるものであった。彼は奴隷制を非難したアングリカン位階制の中の最初のメンバーであった。クエーカーを除いて、彼はそのような主張をしたイングランドの最初の著名な教会人であった。」と述べた³⁶⁾。

ただし、編集者は不明であるが 1788 年に出版された彼の著作集に、この SPG 年次記念大会の説教が収録されているのであるが、そこでは次の奴隷貿易を批判する箇所が削除されていた

37)。「悪名高い奴隷貿易が神と人間両方の法律を直接侵害していることほど、すべての人にとって確かで明らかなものはない。造物主は人間を自由に創造し、神の恩寵は彼に彼の自由を肯定させる 38)。」

彼は、奴隷制は、原始的なアフリカ人の面倒をみて、彼らを高め、そして彼らをより幸福にする人間的な制度なのである、という長い間確立されてきた主張を完全にくつがえした。市民的、宗教的権利両方への侵害であるとして奴隷制を弾劾した。たしかに彼は奴隷の解放や奴隷貿易をやめるようには訴えなかったが、協会が奴隷の輸入をやめて彼らを自由にすべきだとほめかけた。ただし、彼の説教後、コドリントンの不動産における協会の方針も、宣教師への忠告も基本的な変化はなかった 39)。

ウォーバートンの説教から三年後の1769年、ブリストル主教トマス・ニュートン(Thomas Newton)は、奴隷制の批判などはしていないが、次のように奴隷が自由になることを希望した 40)。「民教記第11章29節においてモーセが『あなたはわたしのためを思ってねたむ心を起こしているのが。わたしは、主が霊を授けて、主の民すべてが預言者になればとよいと切望しているのだ』と言われたように、私も、奴隷であれ自由人であれ、すべての民が自由になればよいと切望していると言いたい。・・・」

(2) 奴隷貿易・奴隷制への批判

1783年、ロンドン主教ポーティアスは奴隷貿易に批判的で、奴隷に教育を行うことを熱心に説いていた。

我々の主の主要な注意は、人間の中でも最も貧しい者、最も無知な者、最も無力な者、最も哀れな者に与えられた。・・・啓蒙されていない世界のすべての地区で、世俗・宗教両方の彼らの不足を救うための、我々の憐み深い助けを必要としているあまりに多くの人々がいることを、神は御存じである。・・・イエスが貧しい者、傷ついた者、目の見えない者、捕虜、奴隷とされた者について語る時、誰が我々の西インド植民地の不幸な人種、アフリカ系奴隷について考えるのを慎むことができるのか 41)。

無知の状態から彼らを救うためにこの協会は努力してきた。しかし、我々の努力は望ましい成功を達成していない。それは・・・アフリカ人が宗教的知識を受け、維持する能力がないからではない。黒人はしばしば、直せないほど非常に愚かで愚鈍なので、すべての宗教的教育を受けることができないとみなされてきた。しかし、彼らとともに何年も生活した信用できる人は、これはまったく真実から程遠いと主張している。彼らは本当に、一般的に理解力の点ではヨーロッパ人よりもはるかに下であるが、彼らの多くは手仕事の技術を学ぶことにおいては、急速で器用である。そして、何人かは非常に並はずれた才能と非常に高貴な感情を持っている 42)。

・・・今後、黒人奴隷の文明化と改宗が我々の敬虔な仕事の主要目的の一つとなること、そして、その目的のための適切で実行できる計画が公になることが知られれば、その時にすべての愛情とすべての援助の手が広がるであろう。・・・この善意の真実のキリスト教徒の試みにおいて、グレート・ブリテンが指導していくことは名誉になるであろう。さらに、哀れなアフリカ人の世俗・宗教両方の面で災難を緩和するよう非常に寛大になることは、この国の人々の義務であると私に付け加えさせてほしい。

・・・なぜなら、彼らは何年もの間、・・・非人間的な人身売買に関わってきていて、ほかのどのヨーロッパ諸国よりも多くの奴隷を輸入してきたからである。彼らの手段によって、何千人、何百万人の人間が祖国から、価値あるすべての恵みから、彼らにとって大切なすべての関係から引き離されてきた。そして、彼らは信じがたいほどつらく困難な航海を終えてから上陸して、知らない人々の間に入っていった。そして、彼らの犯罪や誤りは無いのに、永久の奴隷状態へと運命を定められた。その航海の中で彼らの多くが実際は死亡した⁴³⁾。・・・

我々の同国人に、できるだけ早く、非常に多くの人間に引き起こした災難を軽減するよう急がせよう。できるだけそれを和らげ、緩和することによって、そして、彼らを知りずみと罪のより残酷な奴隷状態から救おうとすることによって、非常に多くの純粋な同胞を大変ひどい世俗の奴隷身分にしているという非難を拭い去ろう。・・・心が傷ついた者を癒し、捕虜に救出を説き、目の見えない人の視力を回復し、傷つけられた人々を自由にし、主が恵みをお与えになる年を説くために⁴⁴⁾。

以上のようにポーティウスは奴隷貿易や奴隷状態を明確に批判し、早くそれらを緩和するように説いている。また、奴隷へのキリスト教教育も勧めた。

(3) 奴隷制の緩和・廃止の主張

18世紀後半、イギリス本国と植民地の関係は悪化し、アメリカ独立後に十三植民地はもはやイギリス領ではなくなった。SPGはイギリス領内に活動を限定していたため、1784年頃からは宣教師も派遣されなくなる。ただし、西インド諸島やカナダの植民地には引き続き布教活動がなされた。とりわけ西インド諸島は奴隷を使用した砂糖プランテーション、奴隷貿易が盛んであった。グロスタ主教ハリファクスは1789年の説教において、奴隷制や奴隷の主人への服従は様々な聖書のテキストにおいて認められているとしている。例えば、テモテへの手紙一第6章1節、テトスへの手紙第2章9、10節、エフェソの信徒への手紙第6章6、7節などである。彼は以下のように述べた⁴⁵⁾。

・・・キリストの福音は、人間の身分や家庭内の義務を変更することはなかった。そして、彼は改宗者には[召されたときの身分にとどまっていなさい(コリントの信徒への手紙一第7章20節～24節)という]規則を守らせたのである。・・・聖書において奴隷制度が違法であると宣言しているところを、私は見つけることができない。逆に新約聖書の教義では、それ[奴隷]についての法律は厳しく厳格で従わなければならない。これらの法律が続く限り、主人の支配は以前と同様に絶対的に継続する。・・・理論的にはキリスト教の穏やかな性質は家内奴隷には適していないにもかかわらず、キリスト教が広まればそれだけ奴隷制は衰退するのが真実であるにもかかわらず、そして、西インド諸島において行動を規制している法律は、奴隷の幸福よりも主人の利益を考慮した観点で作成されていて、それらの多くは修正、廃止されることが要求されているにもかかわらず、そのような修正や廃止が実際に達成されるまでは、キリストの王国における奴隷制は聖書の教訓に矛盾していないのである。

・・・しかし、奴隷制に関する法律は注意深く修正されるであろう。そして、必要な

場合は変更され廃止されるであろう。そして、彼らを母国から連れてくる様式と、我々の植民地に運ばれた時の彼らの扱い両方において、奴隷制の恐怖の緩和がまず第一に保証されるならば、その未来の完全な廃止のための道が次第に準備されるであろう。

以上のように、ハリファクスは奴隷制は合法であり聖書でも禁止されていないので黙認している。しかし、キリスト教精神とかけ離れた奴隷制に疑問を持っており、今後廃止されることを期待していたのであった。

1793年、ソールズベリ主教ダグラスは奴隷制の廃止までは述べていないが、次のようにその厳格さを緩和することを説いた⁴⁶⁾。「[コドリントン・プランテーションでは]我々の委託不動産の現在の監督によって指示が繰り返し与えられ、忠実に実行されてきた。このことは、我々自身の奴隷の世俗面と宗教面両方の改善にとって、我々がどれほど注意深いかを表すだけでなく、すべての諸島のプランテーションのすべての地主へ模範として示す手本と考えられるであろう。・・・すべての人間の規則によって奴隷制の厳格さを緩和することは、彼らの利益と同様に彼らの義務である。」

1797年のノリッジ主教マナ・サットンの説教では、キリスト教精神と奴隷制は矛盾していること、キリスト教世界において奴隷制がこのまま続くはずがないことが示唆されている⁴⁷⁾。

キリスト教の主義と義務は奴隷制の存在に敵対しているということは、もはや反対されないであろう。・・・キリスト教は、統治者と被統治者の精神に、秩序、正義、慈悲、赦し、相互の善意、全般的な慈善の愛を徐々に浸透させる。もし、これらのすべてか、いくつかが奴隷制と相いれないならば、疑いなく奴隷制はキリスト教宗教とは相いれない。しかし、このシステムの継続に利害がある人々によって、我々の祝福された救い主の功徳や仲介による福音の光や不滅の希望からは、奴隷は除外されていると主張されるに違いない。・・・福音の伝道か、奴隷制のシステムか、どちらを好むのかということは、キリスト教徒にとって疑問の余地はありえない。

以上のように、一部の国教会聖職者は奴隷制の廃止までは訴えてないが、キリスト教の慈愛の精神に反する奴隷制に反対しており、将来的に緩和・廃止されることを希望していたのである。

おわりに

本稿では、SPG 年次記念大会の説教を中心にイングランド国教会聖職者の説教や著作を検討し、18世紀における国教会の奴隷制についての思想の変化を明らかにした。当時、イギリスやアメリカ植民地における奴隷の主人や多くの人々にとって、奴隷は人間ではなく、主人が購入した財産であった。彼らは、奴隷は野蛮で愚かな異教徒であり、キリスト教を学ぶことは不可能で、彼らに教育や洗礼を受けさせたりする必要はないと考えていた。一部の主人はキリスト教布教に賛成していたが、全体的に SPG のアメリカ植民地における奴隷への布教は困難であった。イギリス人の間では奴隷はキリスト教徒になれば自由になるという習慣や観念があり、主人たちはキリスト教徒奴隷が自由になると自分たちの財産が侵害されるといって布教に反対

した。

一方、イングランド国教会は異教徒をキリスト教化させるのは義務だと考え、奴隷への布教に熱心であった。ただし、SPG や国教会聖職者も、聖書で奴隷制は禁止されておらず、奴隷の主人への服従が書かれているとして奴隷制を擁護した。しかし、18世紀後半になると、奴隷貿易・奴隷制に異議を唱えた国教会聖職者も現れたのである。国教会は奴隷制を擁護する立場であったが変化がみられた。SPG 年次記念大会における説教等を検討すると、一部の主教は聖書で奴隷制は否定されていないとしながらも、緩和や廃止を希望していた。最も早い段階では、1766年にグロスタ主教ウォーバートンが明白に奴隷貿易を非難し奴隷の自由を認めた。国教会は奴隷制を支持しており、SPG 自体もプランテーションと奴隷を所有していたため、このような発言は貴重であろう。18世紀後半に主教たちによって、奴隷貿易・奴隷制に批判的な説教がなされたことは画期的である。

18世紀から19世紀にかけて、クエーカーやバプテストなど様々なキリスト教宗派によって反奴隷制運動が起きた。国教会の高位聖職者の間でも、このような意見がなぜみられるようになったのか、反奴隷制運動の関係者との交流や影響があったのか、という点については検討できなかった。しかし、国教会聖職者も人道的な観点から奴隷貿易・奴隷制は残酷であるとして批判したと考えられる。たしかに奴隷制は聖書で否定されていないが、キリスト教の精神は正義、慈悲、愛であり、奴隷制とは相いれないものである。

奴隷制についての国教会の方針や思想は、クエーカーや議会内外の反奴隷制運動指導者と比較してあまり注目されてこなかった。しかし、一部の国教会聖職者は奴隷制を批判し、18世紀後半には奴隷制に対する国教会の思想に変化が表れたといえる。今後は、具体的な SPG 宣教師の布教活動の様子を本部への報告書等の史料をもとに明らかにしたい。

注

- 1) 青柳かおり「トマス・セッカーとアメリカ主教派遣計画ー18世紀半ばのアメリカ植民地におけるイングランド国教会ー」『西洋史学』44号, 2007年, 48頁。
- 2) C. F. Pascoe ed., *Two Hundred Years of the S. P. G.: An Historical Account of the Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts, 1701-1900* (London: Society's Office, 1901), 4.
- 3) 青柳かおり「18世紀前半における海外福音伝道協会とアメリカ先住民」『史潮』64号, 2008年 (以下「18世紀前半における海外福音伝道協会」と略記), 165頁; H. P. Thompson, *Thomas Bray* (London: S. P. C. K., 1954), 15, 16.
- 4) 青柳「18世紀前半における海外福音伝道協会」166頁; Thompson, 44-46, 57, 58.
- 5) 青柳「18世紀前半における海外福音伝道協会」166頁; Thompson, 57, 58.
- 6) 青柳「18世紀前半における海外福音伝道協会」163頁; 青柳かおり「18世紀前半におけるイングランド国教会と奴隷制ーキリスト教徒奴隷の自由ー」『イギリス哲学研究』第37号, 2014年, 15頁。SPGについては、日本における研究では、塚田理『イングランドの宗教ーアングリカンイズムの歴史とその特質ー』教文館, 2004年, 363頁; J. R. H. ムアマン著, 八代崇, 中村茂, 佐藤哲典訳『イギリス教会史』聖公会出版, 1991年, 386頁で言及されている。
- 7) 18世紀後半の反奴隷制運動についての概説に Christopher Leslie Brown, *Moral Capital: Foundations of British Abolitionism* (Chapel Hill: U of North Carolina Press, 2006)がある。
- 8) *A Sermon Preached before the Incorporated Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts at Their Anniversary Meeting...* (London, 1702-1800) (以下, *SPG Sermon* と略記)。

- 9) David Humphreys, *An Historical Account of the Incorporated Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts...* (London, 1730), 248.
- 10) Isaac Maddox, *SPG Sermon* (1734), 25-26.
- 11) Beilby Porteus, *SPG Sermon* (1783), 8-10.
- 12) Edmund Gibson, *Two Letters of the Lord Bishop of London: The First, to the Masters and Mistresses of Families in the English Plantations Abroad; Exhorting Them to Encourage and Promote the Instruction of Their Negroes in the Christian Faith. The Second, to the Missionaries There ...* (London, 1729), 13-18.
- 13) Humphreys, 235; Anthony Hill, *After Baptizatus: or the Negro Turn'd Christian being a Short and Plain Discourse, Shewing I. The Necessity of Instructing and Baptizing Slaves in English Plantation. II. The Folly of that Vulgar Opinion, that Slaves Do Cease to be Slaves when Once Baptized...* (London, 1702), 28; Robert Robertson, *A Letter to the Right Reverend the Lord Bishop of London, from an Inhabitant of His Majesty's Leeward Caribbee Island...* (London, 1730), 11.
- 14) Gibson, 18-21.
- 15) Hill, 28; George Berkeley, *SPG Sermon* (1732), 19; Herbert S. Klein, "Anglicanism, Catholicism and the Negro Slave," *Comparative Studies in Society and History*, vol. 8, no. 3 (1966):318-319; Rena Vassar, "William Knox's Defense of Slavery (1768)," *Proceedings of the American Philosophical Society*, vol. 114, no. 4 (1970):311.
- 16) Klein, 318-319.
- 17) Richard Ligon, *A True & Exact History of the Island of Barbadoes...* (London, 1673), 50.
- 18) Vassar, 313.
- 19) コドリントンの遺言書は Vincent T. Harlow, *Christopher Codrington 1668-1710* (London: Hurst & Company, 1928), 216-220 に記載されている。
- 20) Vassar, 312.
- 21) Vassar, 313.
- 22) William Knox, *Three Tracts Respecting the Conversion and Instruction of the Free Indians and Negroe Slaves in the Colonies, Addressed to the Venerable Society for Propagation of the Gospel in Foreign Parts in the Year 1768*, new ed. (London, 1789), 14, 15.
- 23) Thomas Secker, *SPG Sermon* (1741), 7-9; Porteus, *SPG Sermon* (1783), 11-13.
- 24) William Fleetwood, *SPG Sermon* (1711), 18.
- 25) George Stanhope, *SPG Sermon* (1714), 16-17.
- 26) Gibson, 25.
- 27) Philip Bearcroft, *A Sermon Preached before the Honorable Trustees for Establishing the Colony of Georgia in America and the Associates of the Late Reverend Dr. Bray at Their Anniversary Meeting March 16, 1737-38...* (London, 1738), 19.
- 28) Humphreys, 235; Hill, 25.
- 29) George Berkeley, *A Proposal for the Better Supplying of Churches in Our Foreign Plantations, and for Converting the Savage Americans to Christianity, by a College to be Erected in the Summer Islands, otherwise Called the Isles of Bermuda*, 2nd ed. (London, 1725), 5.
- 30) Knox, 26-28.
- 31) John Williams, *SPG Sermon* (1706), 20-21.
- 32) William Fleetwood, *SPG Sermon* (1711), 20-21.
- 33) Samuel Bradford, *SPG Sermon* (1720), 37; Richard Smalbroke, *SPG Sermon* (1733), 38; Martin Benson, *SPG Sermon* (1740), 19; Thomas Secker, *SPG Sermon* (1741), 22; Thomas Newton, *SPG Sermon* (1769), 27; Hill, 30-32, 39, 45.

- 34) Gibson, 21-22.
- 35) William Warburton, *SPG Sermon* (1766), 26-29.
- 36) Vassar, 313.
- 37) William Warburton, *The Works of the Right Reverend William Warburton*, vol. 5 (London, 1788), 333, 334.
- 38) “Yet nothing is more certain in itself, and apparent to all, than that the infamous traffic for Slaves, directly infringes both divine and human Law. Nature created Man, free: and Grace invites him to assert his freedom.”
- 39) Vassar, 314.
- 40) Thomas Newton, *SPG Sermon* (1769), 27.
- 41) Porteus, *SPG Sermon* (1783), 6-7.
- 42) Porteus, *SPG Sermon* (1783), 11.
- 43) Porteus, *SPG Sermon* (1783), 31-32.
- 44) Porteus, *SPG Sermon* (1783), 33-34.
- 45) Samuel Hallifax, *SPG Sermon* (1789), 30-34.
- 46) John Douglas, *SPG Sermon* (1793), 21.
- 47) Charles Manner-Sutton, *SPG Sermon* (1797), 16-17.

付記：本稿は、平成 25～28 年度科学研究費補助金（基盤研究(C) 課題番号 25370866）、平成 25～28 年度科学研究費補助金（基盤研究(A) 課題番号 25244035）および平成 25 年度大分大学教育福祉科学部短期プロジェクトによる研究成果の一部である。

Slavery in British America and the Church of England

—Sermons Preached before the Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts at Their Anniversary Meeting—

AOYAGI, Kaori

Abstract

The Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts, the SPG was established in 1701 in order to send the missionaries converting the American heathen. The Missionaries tried to instruct the black slaves in the plantations, however, their masters were against the SPG. It was believed that the slaves could not be converted because they were stupid and without souls to be saved. The planters thought that the slaves were their property and feared that the baptism would make the slaves free. The SPG insisted that baptism did not make any alteration in civil property and that after being Christians, the slaves would be more obedient to their masters. During the eighteenth century there were some SPG sermons which defended the slavery for it was not prohibited in the Bible. Although the Church of England supported the slavery and the masters' property, some Anglican clergy criticized the slave trade and the slavery. It seems that a change was observed in the Anglican thought on slavery in the later eighteenth century.

【Key words】 Slavery, Slave Trade, the Church of England, the Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts